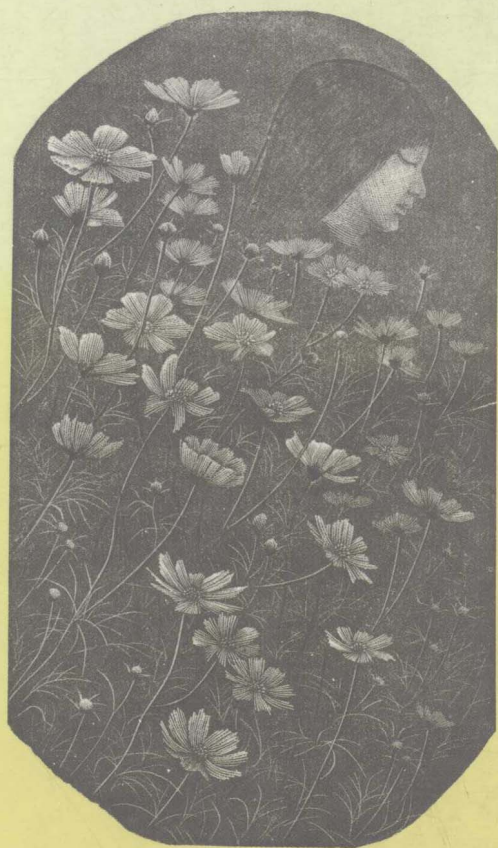


藤野玲

愛が走りぬける時

十七歳
の日記



愛が走りぬける時

十七歳の日記

藤野 玲

青娥書房



愛が走りぬける時

十七歳
の日記

昭和五十三年五月二十日

第一刷

著者 藤野 玲
発行者 加清 蘭

発行所 株式会社青娥書房

東京都千代田区三崎町三一―十一

TEL ○三(二六四)二〇二三

〒一〇一 振替東京九―二二四〇〇

印刷・壮光舎

製本・田中製本印刷

©1978 0095-11066-3972

読者へ

藤野玲は豊かな感受性と夢を持つ少女である。中でも一番すくれているのは自分に対して正直で、生きることにひた向きなことである。そのひた向きさを目を見張るほど美しい。それは十七歳から十八歳にかけての、この日記を読めば解っていただけたと思う。ひとりの青年との愛を真正面から受けとめた少女は、その愛に苦しみ、傷つき、やがては人間の寂しさや許しや祈りを知っていく。大学受験を目の前にひかえて、愛する心と勉強とのバランスの崩れのなかで、幾度も死を願いながらも、人生の敗北者にはなりたくない、強い意志を持って這いあがろうとする、そのけなげさがすばらしい。表現力も歯切れよくて明かるく、詩情に満ちて美しい物語りを読むようで、とても十七歳とは思えない。だれもが一度、通過しなければならぬ青春の門を、この少女は傷つきながらも、さわやかに堂々とくぐって行った。残念なのは、著者が念願がなつて、ストリートで国立大学に入学現在三年に在学中なので、ペンネームでしか発表できないことである。恋のはじめの日が訪れた人たちに、ぜひとも読んでもらいたい本である。

昭和五十三年五月

青娥書房編集部

■目次■

読者へ……………Ⅰ

努力すれば真昼の星が見えるという……………7

何ものでもありうる故に、なにものでもない生の季節……………55

青春は、己が額に流星をうけとめると信じていた頃……………126

恋のはじめの日、墮落のはじまりかも……………225

装画 牧野妙子

愛が走りぬける時

★
レイの日記
★

1975. 4. 14——1976. 2. 22

四月十四日（月）午前中はるさめ

学校では相変わらず呆然。ミチ、ターコ、モネの入学兼卒業祝いを小田急ハルクで買う。ミチと二人で、ブラブラ歩きながら、考えた。最初の頃はお互いの違いなどそんなに気にならなかったのに、なぜこうも違ってしまふのだろうか。馬のネクタイ、ステーションビルにたくさん光っていた。とても素敵なシャツもある。ヒロに着てもらいたいな。男物の洋品をみるとヒロの顔ばかり……。

ああ、あ、寂しいね。いつもヒロのことしか考えられないなんて。何も考えず悩みなく生きていくミチがうらやましい。

また、夜がやってきた。ノートも開かず、勉強もしない。寂しいな、寂しいなではどうしようもない。ひとりしていると何もできない。考え込んで、思っ、くたびれて、もう何もできない。ダメだよ。レイ、がんばりなさい。

四月十五日（火）くもり むしあつい日

学校祭のポスター。二時間かかって書いた。その間中、完全に時を忘れて、タバコ一本も吸わない。不思議だ。

家に帰ってくると、無性に寂しいんだ。しいんとしていて誰もいない。灰色の床、くすんだ壁。誰でもいい、人が居てくれたら少しは救いになるのに。夕方の五時、六時、一番イヤな時間。外へ飛び出して酒を飲みに行きたくなる。耐える。耐える。

今日は絵を描いているうちに寂しさを忘れた。そして夜がきた。ひとりの夜はたまらなく寂しいが、明日がくることを思って耐える。明日……明日。私が求めているものは何なのだろう。そう、ヒロと一緒に暮らせる日を……気が遠くなるような遠いその日を……いまの私には、ただそれを待つことしかできないのだ。

隣の部屋からラジオの微かな歌声。うちの母親は強い人。トオルも、ひとりで眠るのは寂しいだろうね。あの人が他の人に何だかんだと言われても、執拗に家中のラジオ、テレビをつけっ放しにしておくのは寂しいからなんだ。私はよく解る。私も家に帰ってくると、知らないうちにテレビをつけている。人がいないと、音のないのはやりきれない。

春の空気は流れない。暖かくよどんでいる。外へ酒を買いに行く。ヒロと歩いた夜の公園、去年の春を思い出す。星のないおぼろ月夜、二人は何もいわずとても幸せだった。

四月十六日（水）

平凡な女になれそう、それも苦勞せずになれそう、奴が、非凡になりたいと言う。仕事を持ちたい、ひとりで生きる女になりたいと言う。はつきり言っただけでうらやましく思う。

ヒロから電話。酔っている声。大阪の生活は何となく大変そう。寂しいよ。会いたいよ。夜の十時から十一時。この時間は私の一番大切な時間。酒飲んで考えてぼんやりする、眠る前のすばらしい時間。明日という日を信じて、明日を夢みて。

ねえ、馬に乗ろうよ。銀のたて髪、あなたの胸をくすぐるよ。私はあなたの胸に、しっかりとみついて、そして二人で紫の花咲く野を駆けるの。ねえ、馬に乗ろうよ。

涙色の夕焼け、胸を焦がすけど、

私はあなたの美しいうなじに頬を寄せ、そして一緒に駆けて行くの。

燃える夕べの空めがけて馬は駆けていくの。

果てしない荒野を、崩れかけた白壁の家並の道を、馬は駆けて行くの。どこまでも。

美しい夜を求めて。

青い星の下でやすらかに眠りたい、そのやさしい瞳のあなたと。

四月十七日（木）

モネと逢う。モネ、大学生になって、お化粧してとてもきれいになりました。

久しぶりに世界史を覚える。物を覚えるなんて、何と久しぶり。

ヒロと会わなくなってこれで七日目。胸を焦がす寂しさにも慣れたみたい。明日はもう金曜日、すぐヒロに会える。早く、安らぎたい。

四月十八日（金）

あつという間に一週間が過ぎた。

モーローとした、霧の中に、我われは生きているんだよ。始めも終わりもさだかでない、そんな中に生きているのだよ。それが耐えられない。でも知ったところで、人間の哀しみが薄れるわけでもない。

サンテクジュベリ。南方郵便機。処女作。何とまあ、緊張感をもつ作品だろう。私に、生は緊張への忍耐さを、暗に示唆するつもりなのだろうか。生命の何であるかを追求した名作。

四月十九日（土）

長い時間が過ぎていく。絵を描いて時間をつぶす。ヒロが大阪からやってきた。髪の毛をさっぱりと短かく切ってサラリーマンらしい。もうどことなく適当な感じがただよ。ああ、イヤだな。会えてうれしくせに、すぐそんなことを思ってしまう。

ヒロは明日またすぐに行ってしまうのだと思うと、寂しくてメソメソ泣いちゃった。ゴメンなさい。

四月二十日（日）

リラははしゃいでいた。ていねいに朝ごはんを作り、私とヒロを並べて食べさせてくれた。ミルク、ジュース、コーヒ、黒パン、フランスパン、ベーコンエッグ、レタスサラダ。昨夜、酒飲みすぎて頭が痛い。

ヒロは八時二十四分のひかり最終で大阪に帰った。私は東京駅まで行った。

またしてもひとりぼっちの夜。うつろな眼をして耐えるだけ。ヒロと一緒に暮らせる日まで。ヒロは金魚を持って行った。元気な金魚。一ヶ月近くも私の部屋にいたキンギョ。大阪の会社の寮のヒロの部屋であのキンギョ、きつと元気で泳ぐだろう。

ヒロがいるのが当りまえ。横にいるのが当りまえ。そのやさしさや必要性については、つい不感

症になってしまふものだ。ヒロがいなくなると、やみくもに寂しくて。私は、ヒロだけを求めて生きてゐるのだ。

私は絶対、ヒロのまともな奥様になります。それが私の目標！ 生きる目標！

四月二十一日（月）

休み。ヒロ、好きです。酒びたり。

四月二十二日（火）

寂しい、寂しい、やたら寂しい。酒を浴びてもただ寂しい。高校三年生の女の子は、勉強もせず、ひとり部屋にこもって、ただ、ヒロのことを思い涙を流し、どうしてヒロと離れて住まなければならぬのかその意味が解らないのです。私の母であるリラは、自信なげに、女と学問と仕事と結婚ねえ、永遠の未解決だあとというだけで、しょんぼりします。そして時折、発狂したようなこというので、コンランします。早く子ども生んじやいなさいよ、何だかんだといったって子ども生むってすてきだあ。何とかなるよ。本気なのかな、リラの奴。

四月二十三日（水）

「赤と黒」のジュリアンを胸に抱いて、一六〇頁も読みました。あのTV映画の、ジュリアンの眼の妖しげな美しさが忘れられないのです。高貴な婦人を取りこにするあの瞳。今週はこの本があるので何とかもちたえられるでしょう。あと六〇〇頁近く残っています。でもヒロ、電話欲しいの。レイはひとり。ヒロの手紙もない、電話もない。

酒。酒。酒。高校三年の女の子は酒が強い。藤野玲は酒飲み。だらしく寂しがり屋。でもヒロを思うと胸が苦しい。ヒロ、私を抱いて。私はヒロの胸のなかで死んでしまいたい。私は高校三年の女の子。

モーロとしてもリラはおこらない。トオルはリラの顔色をうかがって時折ブツブツいう。変な夫婦。変な両親。そして変な子ども。

四月二十四日（木）

きのうの夜、酒飲んでモーロとしている時、ヒロから電話があったようだ。土曜日の午前中に来るとかいていたように……。

ヒロと二人のために買った小さなウイスキーグラス。そのひとつをリラが割った。ゾーッとする。ターコからベレー帽をもらう。

からだ、かつたるい。さみしい。生きているってかつたるい。

これは三月二十三日の思い出。

学校から帰って酒飲んでいると電話が鳴った。夕方五時、やけに寒い日だ。リラが泣いている。リラの弟のブーケが死んだ。いま警察にいますという。これからブーケを連れて行くからとにかく部屋を片づけろという。酔いがいっぺんに醒めてしゃんとした。あまりのことに実感がなかった。うろろろしているうちにまた電話がかかった。本郷のお寺に行くことになったという。私は腰をすえて酒を飲んだ。あれからもう一月たった。

四月二十五日（金）あめ

今日で連続五日間の菜種梅雨とか！ いやに寒いんだ。世界史の時間、図書室で凍ってしまった。マコって有名演出家の娘なんだって。母親は女優とか。頭がいいし、雑学辞典。マコは高三の友だちの中ではじめて「私より頭がいいな」と思った。

人はなぜ生きるのか。人は時間をどのように考えるのか。人はなぜ存在の恐怖に悩まされないのか。私の頭には、イヤな奴が巢喰っていて、いまの役にも立たない思いや考えばかりが浮かびあがる。巢喰っている悪魔をブツ殺せ。くだらぬ思いが私を疲れさせる。現実とは夢。大きな水槽に入